

総合学習に期待する

関西個性化教育研究会副会長 岡山県遷喬小学校校長 長 道 圓 順

1999年3月岡山県遷喬小学校の旧校舎が、国の重要文化財に指定されることとなった。この校舎は明治40年(1907年)の建築で、当時の町の通常会計年間予算の約2.7倍の巨費が投じられた。建築様式は当時流行していたルネッサンス風の本造であるが、土台から羽目板一枚に至るまで、材料を吟味し念入りに細工を施してある。この校舎は、90年余りにわたって世の移り変わりを、ここで学んだ子どもたちを、ここで行われた教育をじっと見つめて来たのである。重要文化財に指定されることになった今、改めてその威容を誇っている。

現在の校舎は、平成2年(1990年)旧校舎から少し離れたところに建てられた。建築時点では西日本初のオープンスクールであり、また、建築費用も町の一般会計のおよそ一年分に当たるものであった。当時の町長の「金や財産は担保に取られるが、智慧は取られない」ということばや、「明治の先人たち(工匠)の情熱に負けてはならない」と言った設計事務所長の話聞くにつけ、自治体を始め関係者の教育に対する情熱が強く感じられる。オープンスクールの建築に当たっては、当時の東京都立大学の長倉康彦教授、国立教育研究所の加藤幸次先生にご指導いただいた。この時のご縁で全国個性化教育連盟(全個連)にも加入し現在に至っている。

遷喬小学校ではこのような伝統ある恵まれた環境の中で、1985年以来ティームティーチングによる指導の研究を進めて来たが、4年前より「総合学習」の取り組みを進めている。そのころは、「総合学習」あるいは「総合的な学習」ということばはまだ耳新しく、全個連関係の研究会などでは話題になっていたが一般的ではなかった。何をどのように計画

して総合学習に取り組むのか手探りの状態でまず考えられたのは合科的な指導であった。教科等の内容を捨て切れず、教科の関連のある内容を抜き出してつなぎ合わせる、いわゆるクロスカリキュラムによるものであった。「子どもたちを主体に」とは言いながら、「はじめに内容ありき」で、教師の願いが前面に出ていた。これでは子どもたちの総合学習に取り組む意欲も今一つ弱く、教科の学習とあまり変わりがないことに気づいた。

そこで、昨年度より、教科の枠から子どもたちを解放して「子どもと共に創るカリキュラム」とし、総合学習の基本的な考え方を「はじめに子どもありき」とした。そして、「遷喬小学校の総合学習とは、子どもたちが自らの夢や願の実現に向かって、直面する様々な問題に対して全力で考え、取り組んでいく学習である。」と職員で共通理解をして取り組んだ。これによって、今年度の「総合学習」の取り組みは実質的に子ども主体となり、活動が活発になった。1・2年生は生活科の時間を当て、3年生以上は主に学校裁量の時間を当てて取り組んだが、現在の教育課程の中での取り組みは、時間数を生み出すのに工夫がいる。子どもたちは教科の学習では見られないような意欲的な活動をしており、失敗をしてもくじけず、成功をしては成就感を味わっていた。

新しい学習指導要領が告示され、今年度は周知期間、来年度から2年間は試行期間という運びになるであろうが、総合学習は今までの教科とは違って、子どもたちと教師で創っていくものである。したがって学校や教師の力を十分に発揮できるものではあるが、一方、学校や教師の力を問われるものである。

個性化研究発表会報告

今年度も、全国各地のオープンスクールで個性化教育研究発表会が実施されました。その中から会員が実践したり、事務局員が参加したりした研究会を報告します。少しでも会場の熱気が会員のみなさまに伝われば幸いです。

台東区立大正小学校

1月26日(火)

「課題をもって自ら解決する子の育成」

—— 総合学習を通して ——

総合学習に取り組んでから3年目になる大正小学校は今回、「総合学習について一緒に考えてみませんか」という自主発表を行った。

学習活動の実際を見ていただいて参観者の皆さんの感想や意見を伺い総合学習について語り合いたいということで、研究協議会も全体会なしの分科会形式で行った。また、保護者の方にも総合学習を見ていただく機会の一つとして、公開した。

【低学年分科会】 体育館で合同

1年 ゆうえんちで おみせを出そう

2年 たのしいゆうえんち

いたどり学級 「スイートポテトを
作りたいな」

【中学年】

3年 「大正名物〇〇だんご」PR大作戦

4年 みんなで楽しい家をつくろう

【高学年】

5年 ディスカバージャパン(焼き物)

6年 「和紙」



分科会協議では活発な話し合いが行われた。

・課題設定をどのようにしたらよいか

・授業時数の扱い方

この点は各分科会共通の話題だった。

自主発表ながら、参観者は全国各地から約200名で、総合学習への関心の高さを感じた。

(五十子)

八王子市立みなみ野小学校

1月27日(水)

保護者に向けて学校公開

八王子市立みなみ野小学校は、開校2年目の新しい学校である。年2回の学校公開をやってきた。初年度は、主に学校施設とその活用例を公開した。今回は、学校がめざしているものが何であるのかを保護者や地域の方々に理解していただくことをねらっての授業公開と講演会である。

1・2年は、お正月の昔あそびの体験からカルタづくりをして保育園の子どもたちとあそぼうという活動の中の、カルタづくりの場面であった。1・2年合同のグループで、パソコンを利用して絵を描いた。

3・4年は、地域の方々との触れ合いを盛り込んだ学習である。3年生は昔の道具調べの発表会、4年生は自分たちが育てた稲の藁を使い、地域の方々に教えていただいて縄をなつた。

5年は、理科の学習を通して、分かったことを基に問題を作ったり、実際のもので確かめたりした。

6年は、世界の国々の学習の選択体験学習(音楽・料理・切り絵)である。

講演会は、加藤幸次先生に『どうなるこれからの教育』と題して保護者を対象としてお話していただいた。いつもよりくだけた内容で、笑い声とうなづきの多い講演会であった。

(堀竹)



草加市立高砂小学校

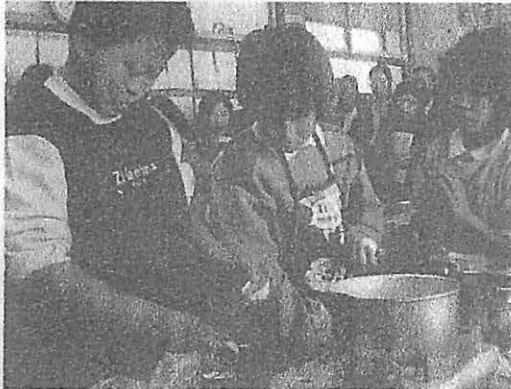
1月29日(金)

「自ら進んで健康づくりに取り組む子」の育成
埼玉県、草加市の両教育委員会の研究委嘱を受けて2年目の研究発表会は、好天にも恵まれ全国各地からたくさんの参観者で埋め尽くされた。

どの参観者も、2002年から始められる総合学習についての関心が高く、健康教育の研究から出発した高砂小の総合学習「高砂すくすく学習」に注目が集まった。2年「大きなだいこんとれたよ」3年「ほんものをめざせ!(アイスクリーム)」6年「おせんべいをつくろう」など、食を取り上げた題材からも高砂小の特色がよく現れていた。どの子どもたちの顔からも意欲が感じられ、授業をしている先生方も子どもと一緒に楽しんでいる様子がうかがえた。

国立教育研究所の奈須正裕先生の講演もとても好評であった。何度も高砂小に足を運んでいる奈須先生ならではの講演は、ざっくりぼらんで親しみやすく、総合学習の今後の進め方が高砂小の実践から見えてくる内容であった。

(館岡)



3年 ほんものをめざせ!

佐賀県鹿島市立明倫小学校

2月4日(木)

未来教育へのアプローチ—21世紀を拓く新しい教科と学びの創造—

南国九州には珍しく雪が積もった2月4日(木)、公開授業研究会が行われた。明倫小学校は、平成10年度から文部省研究開発学校の指定を受け、総合学習による教科の改編に関わる研究を進めている。当日は雪による交通トラブルがあったにもかかわらず、関東以西から幼稚園、小学校、中学校、高等学校の先生方に加

え、大学の研究者など約600名が参加した。公開授業として次の3つの授業が提案された。

- ・2年生総合生活科「とおくのともだちとなかよくしよう」
- ・4年生表現・芸術科「We Love 鹿島一鹿島のよさを劇に表現しよう」
- ・5年生人間科「見つめる命・支える心—患者さんの心にふれよう—」

公開授業の後、研究会が行われ、参加者の意見・質問が次々と出され、公開授業も含め寒さを吹き飛ばすような熱気の中で行われた。研究会で問題になった点やこれからの21世紀の教育について、高浦勝義先生(国立教育研究所教育指導研究部長)や新富康央先生(佐賀大学文化教育学部教授)により、次の演題で講演が行われた。

- ・高浦勝義先生「生きる力の育成と教育課程の編成」
 - ・新富康央先生「総合的な学習と学びの創造」
- 参加者全員、新教育課程と総合学習について深い研鑽の場となった。



オープンスクール紹介

目黒区立緑ヶ丘小学校

本校は、平成9年の9月にオープンスペースをもつ新しい学校に生まれ変わった。オープンスクールは、子どもたちや教職員にとって初めての経験ということで、当初は、壁のない教室で学習することに驚きや戸惑いを感じられた。しかし、オープンスペースがあることを否定的に捉えるのではなく、これからの教育には有効的なスペースであるとの立場に立ち、研究テーマを「主体的に取り組む児童の育成」=オープンスペースを生かして=とし、研究に取り組んだ。

研究の日常化を実現するためには、学習指導、

生活指導の両面からのアプローチが重要と考え、主体性を育てる上での視点を明確にし、研究を進めた。低学年（生活科）においては、自然や人とのふれあいの中で子どもたちの主体性は育つと考え、異学年交流や隣接幼稚園と交流などを積極的に取り入れた授業を実践した。中学年（社会科）では、オープンスペースやメディアスペースを有効に活用し、地域の人材を生かした課題別グループ学習に取り組んだ。高学年（算数科）では、オープンスペースに課題別の学習の場を設定し、子どもたちが自由に選んで学習を進めることができるコース選択学習を実践した。

生活指導においては、主体を子どもに置き、学校生活の様々な場面で教師の指示を最小限にし、子どもたちが自分で考え行動できるよう、自立を促す工夫に取り組んだ。

本校の研究はまだ十分とは言えないが、本研究により、個別化・個性化への一歩が踏み出せた気がする。（緑ヶ丘小教頭大高先生に原稿をお願いしました。）

大磯町立国府小学校



5年 わたしたちにできること
ワークショップ

国府小学校は、神奈川県大磯町にあり、その昔、相模の国の国府が置かれ栄えた所にある。校舎は、平成4年に全面オープンスペースに改築された。平成9年には、新体育館が完成し、

〈事務局への問い合わせ・連絡先〉
〒115-0044
東京都北区赤羽南1-16-2-504
03-3903-4780 庶務部長 佐久間茂和

校庭も整備され、学校のハード面の一応の完成を見た。

オープンスペースの完成に伴い本校でも、個性化・個別化教育の推進に努めた。体験を通して学べるように、カリキュラムの中に地域の教育力を生かす工夫を試みた。積極的に学校を開き、父母や地域住民に呼びかけることにより、現在、ボランティア登録人数は、150名を越えるまでになってきている。

福祉教育の研究、実践から出発した本校の総合学習は、昨年度から本格的にカリキュラムの開発に着手し始めた。学年TT、ボランティアの活用等の従来本校が実践してきた学習を踏まえながら、国際理解、環境、福祉の教育を念頭に入れ、学年カリキュラムを柔軟に作成している。子どもにとって価値ある学習が成立するような題材を子どもの側に立って選択し、試行錯誤する筋道が総合学習であるととらえている。

学年TTを柱とした福祉教育の実践から始まり、環境問題、国際理解等の今日的課題の学習へと広がりを見せていったのだが、どちらかという、教師サイドで計画をしていく、いわゆる「初めに問題ありき」の学習が多く行われてきた。しかし、2002年からの年間110時間の総合学習を考えると、「初めに子どもありき」の学習を考えていく必要が生じてきた。

きめ細かな支援と柔軟な時間の運用を組織しようとする、学年TTの大きな集団よりも学級集団の方が効率的である。子どもたちにとって価値ある学習になるか、子どもの意識の流れを予測することが大切になってくる。このときも本校でこれまで培ってきた学年TTの考え方は生かされ、教師間の話し合いによって、それぞれの学級の活動がスムーズに進むことができると考え、各学年、年1回の校内研究会の実践を積み重ねている。

（館岡）

会費納入のお願い

会費未納の方がいらっしゃいます。振込用紙が届きましたら忘れずに郵便局に足を運んで下さいませようお願いいたします。

全国個性化教育研究連盟会報 第50号
平成11年3月28日発行
編集責任者 事務局長 浅沼 茂
編集 広報部 館岡茂樹